
メンタルシック

塚冷太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メンタルシック

【Nコード】

N0852I

【作者名】

塚冷太

【あらすじ】

小さな店を営んでいるムラノとアイカ。少し特別なお店で、条件に合った客が無意識に招かれる仕組みになっている。その条件とは

…

ブローグ

「アイカ、アイスはまだか？」

足をばたばたさせながら、家の二階の窓の縁に座っている少年が、外の庭にいる女に向かって叫んだ。呼ばれた女はホースで庭の花に水をあげながら、少年に向かって叫ぶ。

「まだ3時まで2時間もありますよー！ それにさっき昼ご飯食べたばかりじゃないですかー！」

まだ夏の暑い日差しが降り注ぐ中、アイカと呼ばれた女は叫んだだけでも立ちくらみを起こしそうになっていた。さらに、少年のアイスのおねだりが余計に状態を悪化させている。あまりにもうるさいのでアイカは溜息をついて、少年を無視することに決めた。アイカはお菓子をおねだりされる親の気持ち、痛いほどわかった気がした。

無視しているうちに、少年はいつの間にか窓から消えていた。今アイカの耳に聞こえるのは、不協和音の蝉の鳴き声と道路を車や自転車が走っている音だけだ。それをBGM代わりにしながら、アイカは延々と水やりを進めた。

ぐったりと犬のようにハアハア言いながら、アイカは水やりをやっと終えた。さっき少年がねだっていたアイスの時間までまだ1時間半。いくら大きな庭とはいえ、30分もあれば水やりなど終わってしまう。少年が拗ねているであろうことが予想できたアイカは溜息をつき、ホースを片付け始めた。頭の中では少年にアイスをあげるべきなのかと、延々と考えていた。

ホースを片付け終わると、冷蔵庫のある二階へと向かう。一階は少年とアイカが店を営んでいて、客を迎えるための家具と店内を美しく見せるための飾りしかない。店とは言っても、客はとも少ないので、滅多に一階に下りることはない。

「アイス……もうないじゃない」

冷蔵庫の中のアイスの箱の中身は何もなかった。アイカは昨日アイスを買に行こうとして行けなかったことを思い出した。それからアイカがやることは一つしかない。少年のいる部屋へパタパタと足音を立てて走った。少年の部屋の前に着き、部屋の扉を突き破る勢いで開けると、少年が驚きのあまり椅子から転げ落ちていた。

「ムラノ！ スーパーへ行きましょう！」

ムラノと呼ばれた少年はゆっくりと上半身だけ起こし、地面に打った頭をさすった。拗ねているのか怒っているのか、アイカの言葉には無反応だった。

「もうアイスがないんです。 ついてきたら好きなアイス買ってあげますよ」

「行く！」

好きなアイスという言葉に反応して、少年はさっきまで痛そうに頭をさすっていたのに、今では立ち上がって一階へ向かって走り出していた。アイカはその変わりようを見て、笑わずにはいられなかった。

「はやく来い！ アイスが売り切れたらどうするんだ！」

「アイスは売り切れませんよ。今すぐ行きますから待っててください」

急かすムラノの声を聞いて、アイカは部屋のクーラーの電源を切り、一階へ向かった。

「本当にまだまだ子供なのね」

アイカの呟いた声はセミの鳴き声にかき消された。

やってきた問題

「アイカ！ もっと早く走れないのか！」

「まったくもう……ちょっと待ってくださいよ」

スーパーでアイス、ついでに今日の晩ご飯の買い物を済ませた二人は、店の前まで走って帰ってきた。ムラノがアイスをはやく食べたくて仕方がない気持ちはアイカにはわかっていたが、さすがにこの炎天下の中、しかも晩ご飯の材料とアイスを持っているアイカには走るのは無茶というものだ。

やっと店の前に着いた。ムラノは部屋に一目散に駆け込むと思いきや、店の前で立ち止まっている。アイカは不思議に思っただけに問いかけた。

「どうしました？ いつもみたいに部屋に行かないんですか？」

「……中に誰がいる」

恐る恐るムラノは扉を開けようとした瞬間

「痛っ！」

「あ……すみません！」

中から出てきたのはセーラー服を着た女の子だった。いまどきみづあみで黒縁のごつい眼鏡をかけている。

「いらっしやいませ、お待たせして申し訳ありません」

アイカはムラノがキレる前に店の中へと招き入れた。

ソファに女の子を座らせ、向かい側のソファにムラノを座らせる。もちろん大人しくさせるためにアイスも忘れずに渡しておく。

「さて、お茶でも飲みながらこちらの書類に記入をお願いします」
お茶と書類とボールペンを女の子の前に置いた。女の子は右上がりの癖がある綺麗な文字で書類にすらすらと書き込んでいく。名前：
相原望、住所：守秘義務……

症状：意識が飛ぶ

症状。それがこの店では一番重要だった。

この店は精神科のようだが、少し違う変わった店だった。精神科でも治せないような病気を治すためにある。

「なるほど、意識が飛ぶ……。詳しく教えてもらってもよろしいですか？」

「あ、はい……」

相原望は俯きながらぼそぼそ話し始める。

「一ヶ月前ぐらいに、授業中に意識が飛ぶようになったんです。最初は授業中だけだったんですけど、時間がたつにつれて頻繁に意識が飛ぶようになって……」

「なるほど……」

「意識が飛んでる間、夢のようなものを見て……。最初はただの睡眠不足かなって思ってたんですけど……。あまりにも頻繁すぎて……」

「その夢の内容、詳しく教えてもらってもいいですか？言いたくないなら構いませんが……」

相原望はしばらく黙っていたが、恐る恐る、一言一言、途切れ途切れに話し始めた。

「私の……願望です。可愛くなって……。男の子と付き合って……。だから、一生このままでもいいって思い始めて……。我に返った時、すごく怖くて。」

冷静にアイ力は聞き続ける。だが、これ以上何も言わない様子を見ると、これが話せる内容の全てなのだろうと理解する。深くは踏み込まないでおくのは、彼女の病を悪化させないためである。中に

はプレッシャーなどで悪化するケースもある。

「なるほど、わかりました。ムラノ……どうですか？」

ムラノはアイスを食べ終わり、棒をずっと舐めていた。その棒を口から話すと、ハッキリと言った。

「お前は病気だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0852i/>

メンタルシック

2010年11月14日14時10分発行